



**文献センター通信**

---

第6号  
2008年3月15日  
一部100円

**富士宮だより  
久板、山鹿さんを偲ぶ**

2008年3月

今年の富士宮は去年に比べて寒い冬だった。

前夜からの雪がいつもの景色を白く変えていた1月21日、以前から龍さんに誘われていた、久板卯之助の命日に墓参りに行ってきた。

朝、龍さんを迎えに行こうと部屋を出て階段を降りようとした途端、雪が霏状に積もっていたところに足を取られ、5〜6段一気に滑り落ち、踊り場で仰向けに

なり動けなくなっ

た。雪が融けて腰から背中にかけてジワツと冷たさを感じてはいるもの

の、何が起きたのかよく理解できず暫くの間立ち上がることができずにジツとしていた。彼もこんな風に、天城の山中で凍死したのかな？（そこまで寒くはなかったが自分が情けなかった）。

多少の痛みはあったものたいた怪我もなく龍さんと共に天城の猫越峠へと向かうことに。ふもとの家も久しぶりの雪模様。富士市を抜けて沼津辺りまでは雪も少なくなるが、伊豆に入るとまた少しずつ増えてくる。天城に近づく

主な内容

古川時雄さんの話	1
文献センター自己紹介	5
ハイマーケット事件	.....
富士宮だより	.....
藤本文庫目録2	.....
運営委員会議事録	.....
	7 6 4 4 3 2

**村木源次郎の詩**

ユキノヤマノオクノオクノ  
オクヤマデ



ヒサイタオヂチャン  
ネテイマス。  
オテオムネニ  
チャントオキ  
雪ヲヒトネニ  
ワライガオ。  
カハラナイカト  
キイタラバ  
静カダイイヨト  
イヒマシタ。  
(ヒサイタチャン)

につれその量も増え、霽も降り出してくる。

国道を逸れ、猫越峠への道は路上にも雪が残り寒さも一段、峠の手前にその墓地はあった。道路脇のスペースに車を止め、山の斜面に造られた墓地を登るとその左側、中段辺りに雪にまみれた久板卯之助の墓が見える。墓前祭の時の写真で見た自然石の味わいのある墓だった。周囲の雪を払うと線香の燃え残りが散らばり、誰かが最近来たように思われる。忘れられてはいないんだな……。手桶の水を使い出れるところまではきれいにしたが、なにせ雪の中、墓に手を合わせ早々に引き上げること

に。天城を離れ沼津の三津を目指す。そこは雪もなくてかな漁港だった。狭い登り坂の途中、切り立った斜面にある山鹿泰治さんのお墓は久板の墓とはまた違う趣がある。自分は墓は要らない、葬式

もするなど云いつつも、何故か人の墓参りはよくするなあと思いつつ、また手を合わせる。

龍さんがかつて漁師の手伝いをしていた瀬川さんを訪ねると、そこで思わぬ話を聞くこととなった。順天堂大學に献体して、標本となっていた山鹿さんの頭蓋骨が訳あって去年の12月20日に引き取られ、29日に納骨されたという。これで山鹿さんの骨が全てお墓に納められたことになる。

山鹿さんの遺志とは違う事になるのだから、自分の遺体にも執着しないということなら、自分の思いよりも残された人の思いどうりに任せるのも一つの選択だろう。子芋の入ったお雑煮を美味しく頂きながらそんなことを考えていた。

2月3日、丹澤農村青年社の小笹さんと“ふもとの家”で飲む。以前に豚舎の2階から落ちた影響がまだ残るが、ビールを飲めるよ

うになってきたのでそれなりに回復してきているようなので少し安心した。龍さん夫妻も少し調子がよかったようで、お酒もいつもより多くすすみ、楽しい時間を過ごした。

2月3日、遠藤斌さんが亡くなられた。1月に龍さんがお見舞いに行ったときに身内の方が3月の百歳の誕生日まで持つかどうか、というほど具合は悪かった様子。暖かくなったら一緒にお見舞いに行こうと龍さんと話していた矢先のことだった。龍さんから聞いていた“幸徳秋水の絶筆の書”を一度見てみたかったが。残念。

作業報告としては、現在ダブリ本の登録をしている。今のところダンボール14箱、数でいうと540冊。ダブリ本だけでいただいた800冊位になりそうです。

2年間ということ富士に来たが、残りも後4ヶ月(6月末まで)。



山鹿さんの墓

まだ作業としては半分ぐらいしかできていないように思う。ラストスパートでどこまで出来ることやら。(山田)

#### キネマ・フェスタの収益金

##### CIRAにカンパ

本紙2号で呼びかけたCIRA支援として、フェスタの収益金およそ十七万円をカンパとして送りました。CIRAによれば、寄付金はほぼ目標額を達成したそう。



### 古川時雄さんの話

#### 「和田久太郎の月見草の花」

一九八八年秋から八九年夏にかけて、一、二ヶ月に一度位、古川時雄・望月百合子夫妻の話を聞く会をもっていった。「個の会」の大竹千歳さんに、百合子さんの話を一緒に聞こうと誘われたからである。いつも巣鴨駅近くの千石町にある夫妻の自宅に夕刻から伺い、持ち寄った菓子などをつまみながら、テープを回し放しにして、自由にお話を聞いた。百合子さん中心の話のときは、時雄さんはゆっくりと耳を傾けてあまり発言されなかったが、震災前後の学生・労働者の運動や「小作人」社、木下茂（ゲルさん）、望月桂さんのことになると、ボツボツと、具体的な描写を下さった。急にパセティックになられることがあつ

て、そんな折に、どこからか古びた和紙に包まれたものを大切そうにとりだされ、見せて下さった。和

紙の間には、色褪せた桜色の月見草が押し花にされていて、久太の死灰で育てた花だ、という不思議な説明も聞いたと思う。いまでもありありとその押し花は浮かぶのだが、委細はよく分からないながら、時雄さんの表情と声はこちらの胸に響いた。時雄さんの命もここに懸かっているんだなあ。

先日、この場面が蘇ったのは、前号にも紹介された望月桂さんの綿引邦農夫さん宛の手紙（四七・五・三）を見た時である。桂さんは時雄さんにとっても親しかった。「俺も久太の注文で死灰で月見草に花を咲かせてやったが…」とあるが、花を咲かせてやりたい複数の仲間がいたのである。時雄さんのあの押し花もその

一つなんだ、と不意に分かったのである。私は、時雄さんを思い出しながら、アナキストクラブの史料を整理していたみんなにこの話をした。二〇〇七年九月三日の会合のときである。前号（第五号）にある「戸田さんがその鉢を見た」と証言してくれた」は、「その押し花を見た」と証言してくれた」の間違いなので、ここに訂正する。

なお、一九九三年に催された『大震災・大杉栄と仲間たち』（実行委員会、真辺気付）のカタログには、「あの世からの花」と題して、うす紅色の押し花が「和田久太郎『後事頼み置く事』より 死灰で育てた月見草（オオマツヨイグサ）」との説明つきで掲載されている。白い罫紙の左側に押し花、右側に「あの世からの花」と書いてある。望月桂さんの筆跡のようにみえる。私が見せられたものに字はなかった。とすると、咲いた花は一つではなかったのではあ

ろう。この展覧会を見にいったのも、時雄・百合子夫妻と一緒であった。大杉栄の絵の前で、宮本三郎さんも私はいって撮った写真がある。

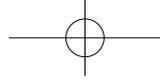
（二〇〇八・三・八 マラテスタ研究センター 戸田三三冬）

#### アナキズム文献センター

#### 会員を募集！

二〇〇六年三月の京都集会、七月の第二回富士宮集会を経て、文献センターの活動の実質化を図るべく、会員制のもとで活動・体制づくりを進めてきました。文献センターへの参加を広く呼びかけています。

皆様の積極的な参加をお願いします。会費は年間一口一〇〇〇円としていますが、可能であれば複数口でお願いいたします。



## 文献センター 自己紹介 5

ただし、これが今後の活動を規定するものではない。少なくとも現在までの活動においては、以上の考え方なり活動の方法がもっとも有効であった。しかし、文献センターがセンターとしての実質を得るためには、また異った活動の方法をもたなければならぬとも思う。そのような取り組み方を表現する標語として「来る者を拒まず、去る者は追わず」が、その頃のメンバー間でよく口にした合言葉であったことを思い出す。

### 反応の一、二

以上は当時の報告に記された文章であるから、いくらか表現上では違和感を覚えないことはないものの、その論旨は今でも異存はない。

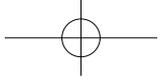
しかし、こうしたセンターの出發とやり方がその当時、周囲からどのように見られていたかを私たちはほとんど考えたことがなかった。と言うより、考える余裕もつていなかった。そして、その点をいくらか示してくれるのが、前述した私の手紙にメモされた文言である。そこには「おそらく、オールドには誰一人相談なく、この文章と共にカンパを先に呼びかける、現代子のあつかましさ」「勝手に尾関と2人で決め、こんな物を全国に出すとね」と書き込まれている。つまり、センター設立をこのような印象とともに受けとめた人もいた。しかし、そのような意見を本人はもちろぬ、他の人からも直接耳にしたことはなかったので、その意味で手紙のメモは私には意外なことであった。

ただはつきりとした反応は1つだけあった。それは笹本雅敬からの提案で、私と後述する“ばおばぶ”のメンバー二人とが会うことになった。提案は発起人を立てて、広汎に呼びかけていこう、発起人には埴谷雄高、吉本隆明の名もあげられていたように記憶する。同氏のことであるから、この提案は何らかの異った形でのセンターを実現させたのではないかと思う。今にしてそのように考えられるのであるが、私自身よく知る人ではなかったし、ましてや他のメンバーは初対面であったから、その提案を受け入れることはできなかった。つまり、その提案は、当時私たちが考えていたやり方とは対極に位置していたからである。このように書いてきて、長いこと頭にひっかかっていたあることが氷解したように思う。七二年頃のことであるが、私は過労から初めて入院することがあり、その後にある人から「功を焦って入院することになった」との言葉を聞かされて、その真意が理解できなかった。

たのであるが、おそらく笹本提案の拒否がどのように受け止められていたのであろう。

### 書庫の建設とばおばぶ(一九七二年)

センターの構想拡大とアピール以後、活動の具体的な手掛りが得られなかったが、翌年一月から「東京自連」のメンバー数名との接触が生まれ、センター設立のための話し合いがもたれ始めた。この集まりが間もなく、センターの建設を目的とした“ばおばぶ”グループとなり、定期的会合、センター構想の具体化、通信の発行、書庫の建設等に取り組んだ。その主なメンバーは田村、小林、上村、石坂、佐藤、工藤、山下、奥沢であった。七、八月の書庫建設にむけた諸活動は、“ばおばぶ”グループが担当し、二度にわたるワーク・キャンプには尾関弘と大阪の有志の協力、呼びかけに応じて参加した十名余の参加者を得て、八月に書庫



### 「David Rovics ☆でいな〜しょ〜」!

おいしいてづくりベジ料理とデヴィッドのライブの日です。

こじんまり、じっくりと。ライブ後の交流会もおたのしみ

3月28日(金) 開場:19:00 / 開演:20:00 ※19:30から「デモクラシー・ナウ!」ロビックス出演映像など

場所: 高円寺 素人の乱 12号店

住所: 東京都杉並区高円寺北3丁目フデノビル2F 奥の部屋

入場料: ¥1500 デイナーつき ※電話なし

米国のプログレッシブ・ムーブメントの「声」と呼ばれるデビッド・ロビックスは反戦、反WTOなど北米・欧州を中心に世界のデモや直接行動の現場でギターを弾き、歌ってきました。デビッドの音楽家としての重要性は、チリのサルバドル・アジェンデ政権を実現した1960年代から70年代の民主化運動&革命で文化・政治的に主導な役割を果たした歌手ビクトル・ハラにも匹敵するでしょう。昨夏のデビッドの来日時にライブを聞き逃した方、今回は絶好のチャンスです。

の建設を終えた。作業としては、材木運び、基礎工事、床張り、その他内装を担当し、建前、外装は本職に頼んだ。建設費用二十万円余りは龍さんの負担であった。書庫建設の後、残された内装作業、備品と書籍を東京から運んだ

り、その整備に終われたりしてしたが、同時にセンターの運営を含めた課題が浮びあがってきた。そして運営案もつくられたが、それも意見の一致を得ぬままに、活動は停滞し、翌七二年一月に“ばおばぶ”は活動を停止した。(続く)

### ヘイマーケット事件の

### モニュメント

ヘイマーケット事件のことはよく知られていよう。八時間労働を求める労働運動は一八八六年五月一日に世界各地で大示威運動が展開されて一つの頂点を形成した。

シカゴにおいては、警官による労働者殺害に抗議する集会がアナキストによる呼びかけで、五月四日ヘイマーケット広場で催された。集会は平穩に行われたが、警官隊が解散を命じたとき、何者かが爆弾を投じて乱闘が起こり、双方に多数の死傷者(警官側死者七名)を生じた。これをヘイマーケット事件と呼ぶ。警官殺害を教唆したとの科で八名のアナキストが裁判にかけられ、ヒステリーの状況の中で五名が死刑(うち一名は獄中で自殺)、三名が禁固刑となった。九三年、州知事オルトゲルドは裁判が不当であったとし

て、禁固の三名を恩赦とした。事件は八時間労働運動に大きな打撃となったが、この事件の記憶をも含めて五月一日は第二インターナショナルによって国際的な労働者の連帯の日とされ、メーデーの起源となったとされる。

それから一二五年後の二〇〇四年、同事件で処刑されたアナキストの銅像がシカゴに建立。シカゴでの地元感情が融和されてアナキストはようやく認知された。例えば、ニューヨークタイムズ紙はヘイマーケット事件を記念したこのモニュメントの落成を紹介した。(写真)



モニュメント

## 藤本文庫・目録（第2回）

金子光晴論	嶋岡晨	五月書房
金子光晴研究	首藤基澄	審美社
人物昭和史 8 漂泊の生涯	室謙二／津村喬／青地農他	筑摩書房
秩父事件	自由民権期の農村蜂起 井上幸治	中央公論社
自由民権の民衆像	秩父困民党の農民たち 中沢市郎	新日本出版社
愛知産別会議小史	愛知産別会議歴史編纂委員会（編） 愛知産別会議残務整理委員会	
大逆事件	絲屋寿雄	三一書房
鎖塚	自由民権と囚人労働の記録 小池喜孝	現代史出版会
大阪 詩集	小野十三郎	創元社
とほうもないねがい	小野十三郎	思潮社
死刑	消えゆく最後の野蛮 正木亮	日本評論社
裁判	伊藤整	筑摩書房
十九階日本横丁	堀田善衛	朝日新聞社
インドで考えたこと	堀田善衛	岩波書店
北一輝	長谷川義記	紀伊國屋書店
平民社時代	荒畑寒村	中央公論社
続平民社時代	荒畑寒村	中央公論社
荒畑寒村 人と時代	寒村会（編）	マルジュ社
寒村茶話	荒畑寒村	朝日新聞社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 I	唾蟬坊流生記 添田唾蟬坊	刀水社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 II	浅草底流記 添田唾蟬坊	刀水社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 III	空襲下日記 添田知道	刀水社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 IV	演歌の明治大正史 添田知道	刀水社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 V	日本春歌考 添田知道	刀水社
添田唾蟬坊・添田知道著作集 別巻	流行歌・明治大正史 添田知道	刀水社
添田唾蟬坊・知道	演歌二代風狂伝 木村聖哉	リポート
壺井繁治詩集	壺井繁治	眞理社
内山愚童	森長英三郎	論創社
大逆事件	尾崎士郎	雪華社
母と私	九津見房子との日々 大竹一燈子	築地書館
山鹿泰治	人とその生涯 アナキズムとエスペラント 向井孝	自由思想社
久さん伝	あるアナキストの生涯 松下竜一	講談社
九津見房子の暦	明治社会主義からゾルゲ事件へ 牧瀬菊枝（編）	思想の科学社
ルイズ	父に貰いし名は 松下竜一	講談社
海の歌う日	大杉栄・伊藤野枝へ——ルイズより 伊藤ルイ	講談社

(次号に続く)



## 運営委員会議事録（抄）

### 一二月運営委員会

一月一七日（土）

二〇〇八年版カレンダーが完成し、メインは、梱包作業。丁合をとりケースに収め、袋に詰める。

■会員の継続案内 現会員には、カレンダーに案内を同封して継続の案内を出す。

■センターの郵便口座の移転 年内に住所変更する。（編集部注：二〇〇八年三月現在、完了し、振り込みの案内などは、東京に届いている）

■センターのウェブサイト ほとんど更新ができていない状況のため、各担当者が更新できるようにシステムを使って構築する。

### 一二月運営委員会

二月一五日（土）

メインは、文献センター通信の発送作業。カレンダーと通信を同

梱して発送した。

■CIRAへの送金 夏のキネマフェスタの売上金を、スイスのCIRAに送金した。

■蔵書の今後 富士宮で蔵書目録の作成・整理を担っていた山田氏が〇八年に静岡県から離れる予定である。現在、少なくともセンター（入りきらない）蔵書が同氏宅にある。引越後、この蔵書をどうするか大きな課題となる。

■LLC設立について センターの法人化については、〇八年にLLC（合同会社）を設立する方向で詳細をつめていくこととした。

■〇九年カレンダーについて 今回、〇八年版カレンダーを発行することはできたものの、これから毎年発行を続けて行くには、資

金的にとりより、体制的に限界があるだろう。そこで、外部の

人たちを交えて、制作委員会方式でやっていく。

■事務所について 二〇〇八年一月をメドにアナキズム誌編集委、IRA（イレギュラー）、文献センター、+αにて、新宿・三井工務のシェアをスタートさせる（注：三月現在作業中）。

■〇八年の文献センター通信 三月、六月、九月、十二月の計四回。総会について 二〇〇八年中に開催する予定（詳細は後日）。

■第二期自由人講座「東京アナキーナイト」（仮）開催へ ポエトリーインザキッチン（夏のキネマフェスタの会場）で各種テーマでゲストを招き、年四回くらいやっていきたい。また、併せてこ

れまでの自由人講座をまとめる。

### 一月運営委員会

一月一九日（土）

■合同会社の設立について LLC Cについて次のような話をした。

LLCまたは法人化の一番の目的は蔵書を個人的な所有ではなく、永続化をはかるため、その所有権を明確にすること。

経営母体の定款の中で掲げる事業の一つが文献センターの維持・研究を担う。事業で得た利益は、勝手に処分しないよう定款に明記し、繰り越す。蔵書の処分方法などは定款で決める。

LLCでは構成する社員が権利を持つ。四、五人が社員になって会社を起こす。出資金は一円から、毎年七万円の法人税がかかり、利益が出ると税金を取られる。その他に設立時の費用なども。司法書士に頼むと一〇万円（電子定款の場合）かかる。

設立までには、所有権の問題をクリアしなければならぬ。例えば、寄贈の形など、など、

■総会について 七月に富士宮で集会を実施する予定。文献センターの総会ではなく、交流会とす

**アナキズム文献センター-収支決算報告書**

2007年1月1日～2007年12月31日

**収入の部**

科目	金額	摘要
前年繰越金	226,043	
会費	67,000	1000円×67口(25名)
カンパ	60,242	
カレンダー、イベント物販	191,297	
その他	420,000	故藤本さん関係
収入計	964,582	

**支出の部**

科目	金額	摘要
通信費	7,633	サーバ代など
センター維持費	150,000	富士宮の光熱費等 (龍さんへの送金分)
イベント関連費	186,432	キネマフェスタ、 米ブックフェアほか
カレンダー制作関連	73,633	08年版の印刷費ほか
その他出金	371,810	振込手数料負担、 名古屋送金など
残金	175,074	来期繰り越し
支出計	964,582	

上記の通り報告いたします。

2007年12月31日  
会計係/古屋淳二

る。  
**二月運営委員会**  
二月一六日(土)  
■スイスCIRAに派遣 N氏が、七月の反G8宣伝のため、二月末から三月末にかけてヨーロッパを訪問。その日程のなかで、ロザンヌのCIRAを訪問(十手伝い?)する予定。  
■サポート委員会 反G8関係の

旅費については、これまで文献センター以外も含む幅広い人たちにカンパを募っていたが、今後は反G8にとどまらない運動体の基盤をつくるべく、サポート委員会を設立(予定)し、会計や報告会などもきちんとしていく体制をつくっていくという趣旨の協力要請あり。協力できるところは協力していくことにした。  
■ロヴィックスライブ 文献セン

ター主催のイベントとしてライブを計画していたが、現状の体制を考えると主催は無理。そこで、共催という形で、主催者をサポートしていく。ただ、ロヴィックスのライブは都内数カ所で行われる予定のため、ライブではなく交流会という形は、と提案。(注:ライブ告知を参照のこと)  
■今後の予定  
三月:ロヴィックスイベント

(協力)

五または六月:イベント(共催)

※テーマは「サッカーとアナキズム」(未定)

七月後半:交流会(富士宮)

秋:イベント(主催)

※テーマは、戦後美術運動?

■年表 年表作業は、一九八〇年代以降について「自由意志」「黒の学校」など媒体別に、とりあえず抜き出していく作業を開始していく。

**アナキズム文献センター通信**

第6号

発行/二〇〇八年三月一日

発行所/アナキズム文献センター

編集/運営委員会

連絡先/東京都新宿区新宿

1の30の12 三月工房気付

郵便振替口座/

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール/

info@cira-japan.net

定価/一部一〇〇円